

## 博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	作業療法学分野
学籍番号		院生氏名	白砂 寛基
通学キャンパス			
論文題目	急性期から応用的活動を積極的に用いる作業療法介入の検証 ～作成した院内活動表を用いて～		
審査結果(枠で囲む)	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">合格</span> <span>不合格</span> </div>		
<p>1. 研究の概要</p> <p>本研究は、『病院に入院中の作業療法対象者は、発症直後には安静を強いられる場合が多く、安静度が日々改善しても臥床でいる場合が多いと感じている。その理由には、対象者自身が改善してもどの位、動いてよいかわからないということや、病院という環境が対象者を必要以上に日中臥床状態で過ごすことに影響を与えているのでは』との問いから発し、作業療法が急性期に果たす役割について検討することである。作業療法士は、保健・医療・福祉・教育など広範囲の領域で働いており、その歴史も半世紀に至っている。医療の中では、身体障害領域である一般病院に働くものが多く、急性期、回復期、維持期と対象者の病期に合わせてサービスを提供している。急性期の役割は、疾患の集中的治療と二次障害の予防とされている。しかしその役割は限定的であり、特に急性期で応用的活動を積極的に取り入れることは少ない現状である。研究の目的は、急性期の介入方法を検討することである。方法は、研究基本構成を研究1、研究2とし、研究1で、「院内活動表」を試作し、その応用動作を積極的に用いた試作「院内活動表」を踏まえて、研究2で介入研究を行っている。研究1では作業療法文献事例から113事例を抽出し、その活動から119項目抽出し試作「院内活動表」の作成に至った。次に急性期病院にて9名の作業療法士に5か月間院内活動表を用いて介入(1回20分)、同意を得られた16事例に対して試作版院内活動表を用いた介入を行いどのような項目が用いられたかチェックした。119項目中57項目(47.9%)が1週間以内にチェックされ、最終的に60項目の「院内活動表」とした。研究2では、A,B,C3病院において「院内活動表」を用いて75歳以上の患者で介入群18例と対照群14例の2群間の比較は対照群のコントロールが必ずしも一定ではなかったため明確な違いは見いだせなかった。しかし介入群の患者は介入時間外の時間の活動性が活発になる傾向もみられ、生活全体の活動性の高まる傾向があるとの知見を得られた。</p> <p>2. 本研究の限界と今後の課題</p> <p>対象疾患(CVA)、性別、疾患特性など検討されなかった項目も多く、今後の課題である。</p> <p>3. 知見の新規性と価値</p> <p>本研究は作業療法士の急性期での役割と介入効果を期待して応用的「院内活動表」を作成し、また研究2でそれを使った介入効果検証を行い、導入に期待できる検査表の開発を行った。</p> <p>4. 審査経過について</p> <p>審査会は11月25日第1回、12月16日第2回最終修正点を確認し、年内に更に修正し、合格(修正論文をメールで配信、検討、回答は主査集約し、審査員、院生へ結果を回答)とした。</p> <p>5. 口頭試問の結果について：口頭試問において質問に丁寧・的確に回答し、論文の修正をした。</p> <p>6. 総合結果について</p> <p>審査会の審査員全員は、本研究論文が作業療法学・作業療法活動支援学分野への臨床的貢献を有することで、博士(保健医療学)を授与するにふさわしいものと認めた。</p>			
論文審査担当者	<p>主査 黒川幸雄 教授</p> <p>副査 長尾嘉子 教授</p> <p>副査 井上善行 准教授</p>		